

2025年度、第2回「ウェルビーイングプロジェクト」外部評価委員会報告書

2025年5月14日(水)に外部評価委員会を開催し、7名(1名欠席)の外部評価委員から外部評価委員会開催後にコメントを得たのでその概略を報告する。また、下記の①～⑥の項目について、5点満点で点数化による外部評価を行ったので、併せて報告する。

- ① 本研究プロジェクトの目的、研究体制および予算の妥当性について
- ② 本研究プロジェクトにおける各ラボの研究体制および成果について
- ③ 本研究プロジェクトの現在までの目標達成度について
- ④ 本研究プロジェクトにおける研究費助成制度の研究力向上への有効性について
- ⑤ 本研究プロジェクトで推進する若手研究者育成について
- ⑥ 本研究プロジェクトの推進による大学の研究力向上への貢献について
- ⑦ その他

(1) 上記項目に関する各委員からのコメントの概略

① 本研究プロジェクトの目的、研究体制および予算の妥当性について

【優れた点】

- ・目的が明確で学際的な体制と安定した予算配分が確立されている。
- ・研究への意欲を成果にするべく、素晴らしい体制が敷かれ、成果も上げられていると思いました。
- ・以前も感じたが、学内での臨床、基礎の垣根をこえて一つのテーマに向かって進んでいくことは非常に大切であり、そのための体制は十分に練られていると改めて感じた。
- ・本研究プロジェクト開始から2年間において、目的と研究体制の構築・維持のために人的支援と予算確保が確実に実践されており、大学と執行部が研究力向上に驚異的な貢献をしている。研究費助成制度、若手研究者育成や産学連携支援部の創設など、プロジェクトにかかる研究体制について極めて高く評価できる。研究成果から、それぞれの研究者が努力して研究を推進していると考えられる。
- ・「ウェルビーイング」を意識したさまざまなシンポジウムなどが開催されており、プロジェクトの方向性を実感することができます。研究体制や予算などの仕組みは理想的な状況です。

【検討が必要な点】

- ・一方、臨床研究、動物実験、細胞実験、遺伝子解析などを一貫してマネジメントした研究が生まれる土壌は整っているので、研究体制を活かして複数の内容が有機的に連携するとさらにインパクトのある研究成果を創出する伸び代があるかもしれない。
- ・本プロジェクトの目的が、研究成果から新規歯科医療の開発に繋がるイノベーションを見出すこととなっており、プロジェクト期間中に達成することが可能な具体的な目的設定があった方が、プロジェクトの達成度を具体的に示せると思われた。

② 本研究プロジェクトにおける各ラボの研究体制および成果について

【優れた点】

- ・各ラボが専門性を活かし多様なテーマで成果を挙げている。
- ・論文業績など量的に十分な成果が出ていると感じました。

【検討が必要な点】

- ・質に関する話題がありましたが、4つの各ラボは基礎または臨床に所属する研究者で構成されているので、基礎研究と臨床研究をさらに有機的に連携することで、相乗効果のある研究が生まれて社会実装の現実性が高まり、よりインパクトのある成果が創出される余地が残されているように思いました。
- ・研究業績評価に IF 平均値等を用いているが、論文引用数、h-index、構成員の筆頭著者や責任著者の論文数など、本プロジェクトの効果を判定できる客観的評価基準があると良いと思われた。
- ・分野横断的な研究プロジェクトの実効性について、客観的データがあると良いと思われた。
- ・IF 評価から被引用数、国際共著論文数、社会実装・特許・技術移転などの評価指標を加える。
- ・一部のラボでは連携が活発に行われているが、他のラボでは連携が形式的にとどまり、実質的な共同研究や新たな融合的テーマの創出につながっていないケースがある。成功事例の共有や、連携の質を評価する指標の導入を検討する。
- ・同窓、あるいは一般の臨床医に対して、その成果をなるべく早く有意義な形で下ろしていただきたいです。リカレントセミナーは、その代表ですが、産学協同のプロジェクトが進めば、製品として我々1歯科医師にも恩恵が得られるのではないのでしょうか。是非、お願いいたします。
- ・また、リカレントセミナーの様に大きな会ではない小さな会での発表の機会が増えることも良いかと思えます。たとえば同窓会支部の学術講演の様などころでの基礎的研究の発表の機会が増えると、双方のメリットにもなるかと思えます。

③ 本研究プロジェクトの現在までの目標達成度について

【優れた点】

- ・期間が限られている中での成果としては、十分なものであると考えられるが、最後の総評で述べたように今は大きな成果を生み出す前の平衡状態であるように感じられた。そのような次のステップを目指すといった願いをこめて、あえて成果については4を付けた。
- ・短期間において、プロジェクト遂行による研究力の向上、若手の鼓舞が見受けられ、今後の発展も期待できた。研究環境は高いレベルで整っており、地理的な利点も生かして、とても魅力的な研究室を提供できている。特に、溝口博士を筆頭に、各研究領域のリーダーが、それぞれのサイエンスの面で優れた成果をあげており、若手の育成においても十分な手腕を発揮できている。
- ・それぞれの研究者が真摯に目標に向かって研究を推進していると感じます。目標達成度を%表示で数値化したのは分かりやすかったと思えます。

【検討が必要な点】

・今後の課題としては、これをたゆまなく継続し、さらに次のステップに進めることが大切かと思われる。具体的には、PI や若手研究者の研究時間が可能な範囲で確保されることで、AMED PRIME や JST 創発、さきがけなどの医歯学研究者の登竜門となるようなファンドにも積極的に応募し、これを獲得することも十分可能であると思われる。

・改善する点が残されているとすると、KPI(重要業績評価指数)とは申しませんが、数値化できるマイルストーンのようなものを目標として事前に設定しておくとともに客観的で分かりやすいかもしれません。

・いかに高い目標を持って、難題、そして、世界を見渡しても他者(他大学)が取り組まない課題や手法論の開拓に挑戦するか、が次のステージではないか。そうすると、研究は、ある意味で失敗の連続となるかもしれない。よって、若手あるいは准教授以下の先生方には明確なシナリオで確実に成果を出していただきつつ、教授の先生方には失敗を恐れずに冒頭のチャレンジングなテーマに取り組んでいただきつつ、科研費基盤 B 等へも果敢に応募していただきたい。

いろいろな個別要素技術を組合せて行う研究において、イノベーションは、はるか雲の上と思わず、自身が得意なツール(武器)の使い方を少し変えるといった発想の転換を加えて、そういう個別要素技術を組み合わせれば、これまで誰も提案しなかった新しい手法論が生まれる可能性は十分にあって、つまり、イノベーションの種は意外と身近にあるに違いないと私は信じています。

④ 本研究プロジェクトにおける研究費助成制度の研究力向上への有効性について

【優れた点】

・学内の研究費助成制度として極めて恵まれた状況です。

【検討が必要な点】

・報告書 p.8 ②イノベーション促進研究費助成の「一部の採択課題では異分野連携の促進が見られたが、期待したほどの効果が見られない課題も散見された」点については、大学として今後進む方向を示すこととも関連すると思われるので、吟味いただけると幸いです。

⑤ 本研究プロジェクトで推進する若手研究者育成について

【優れた点】

・次世代研究者育成については大きな成果をあげており、今後の展開が期待される。
・若手サイエンスアカデミー等を通じて育成が活発に行われている。
・若手研究者を育成する多くの仕掛けが作られていて素晴らしいと感じます。今後の研究者の育成成果が楽しみです。

【検討が必要な点】

・若手主体の運営体制構築と更なる国際交流強化が望まれる。

⑥ 本研究プロジェクトの推進による大学の研究力向上への貢献について

【優れた点】

- ・多数の論文発表や外部資金獲得など目標達成が進んでいる。
- ・科研費配分額で全国首位を維持するなど大学の研究力向上に大きく貢献。
- ・前回提案した産学連携組織作りに関しても、兼任ではあるが URA などの外部との窓口を設立、外部顧問の採用など、迅速に変わられていることに今後の発展性を確信した。今後も新しいテーマで、学内での連携を構築して、対外的に広く研究を発展していけるような体制を維持してほしい。そして、いま醸成されている次のステップのための平衡状態を突き抜けて頂くことに期待したい。
- ・経営陣から各研究者まで「大学全体が同じ方向を向いている」ということが本当に大切だと感じました。簡単に実現できることではなく、貴学の一強時代は当分の間は揺るぎないものと期待しています。
- ・この2年間で産学連携支援部を創設されて、保田尚孝先生をアドバイザーとしてリクルートされたことに感銘を受けました。時間がかかり労力の要する課題と思いますが、これから実装していくことを祈念しています。

【検討が必要な点】

- ・科研費種目別採択件数について、「若手」「基盤 C」で大きな成果をあげている一方で、「基盤 B」では変化がなかった。より高みを目指す研究者の育成が今後の課題であると思われる。
- ・URA の整備についても着手しているが、更なる充実した研究支援体制が期待される。
- ・論文数・IF が横ばいで質的向上が求められる。
- ・基盤 C から B 以上への採択増が課題。

⑦ その他

特に無し

(2)総括

前回の外部評価委員会では、本研究プロジェクトによる社会的実装性の実現がキーワードとして挙げられていた。今回の同委員会では、2年間という短い期間にもかかわらず、産学連携支援部が創設され、保田尚孝先生(オリエンタル酵母工業)をアドバイザーとして採用されていたことに非常に感銘を受けた。そして、顎骨疾患プロジェクトからバトンを受けたウェルビーイングプロジェクトにより大学が研究を本気で推進していこうといった姿勢を強く感じた。これら結果を振り返り、大学からの潤沢な研究費助成が有効に使われていることを感じた。

以前にも述べたが、立ち上げられている4つのラボもそれぞれの独自性・特徴を保ちながら具体的で魅力的な研究方針が提言され実行されていた。そして、若手の研究支援として多くの助成を行ったことは、本プロジェクトが時間的な縦の繋がりも重視した結果だと改めて感じた。今後、得られた多くの研究シーズからさらに研究を絞っていき、4つのラボの相互関与を強め大きなテーマを発掘していかれることに期待したい。そして、基盤研究 B 以上の大型研究費が大学としてとれるように積極的にチャレンジしてほしい。そして、いま醸成されている“次のステップのための平衡状態”を突き抜けて頂くことに期待したい。

(3)外部評価委員会開催後の上記項目①～⑥における数値による評価

評価は、以下の6項目についてそれぞれ5段階で行われ、具体的なコメントは文章にて提示された。総合平均点は4.7であったが、項目別では②「各ラボの研究体制および成果」が最も低く、平均点は4.4であった。これに関しては、以下のような改善案が示された。(1)基礎と臨床の連携を強化し、研究の実用性や社会実装性を向上させること、(2)被引用数や h-index など、IF 以外の多面的な評価指標の導入、(3)分野横断型研究やラボ間連携の質を客観的に評価・可視化する仕組みの整備、(4)成果の早期還元に向けた発表機会の拡充。これらは、研究体制および運用面における改善の必要性を示す意見として提示された。

評価項目	評価委員A	評価委員B	評価委員C	評価委員D	評価委員E	評価委員F	評価委員G	平均点
① 目的、研究体制および予算の妥当性について	5	5	4	5	5	5	5	4.9
② 各ラボの研究体制および成果について	4	5	4	4	5	5	4	4.4
③ 現在までの目標達成度について	5	5	4	4	5	5	4	4.6
④ 研究費助成制度の研究力向上への有効性について	5	5	4	4	5	5	5	4.7
⑤ 若手研究者育成について	5	5	5	5	5	5	5	5.0
⑥ 大学の研究力向上への貢献について	5	5	4	5	5	5	5	4.9
平均点	4.8	5.0	4.2	4.5	5.0	5.0	4.7	4.7

外部評価委員(五十音、敬称略)

上岡 寛(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯科矯正学分野 教授)(委員長)

浅原 弘嗣(東京科学大学大学院医歯学総合研究科 医歯学系専攻 先端医療開発学講座システム発生・再生医学 教授)

大島 勇人(新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻 顎顔面再建学 教授)

自見英治郎(九州大学歯学研究院附属 OBT 研究センター 教授)

高野 直樹(慶應義塾大学 理工学部 機械工学科 教授)

高橋 潤一(東京歯科大学同窓会 総務担当理事、東京歯科大学水道橋病院保存科 臨床准教授)

田中 芳彦(福岡歯科大学 口腔歯学部 感染生物学分野 教授)

山崎 和久(理化学研究所生命医科学研究センター 粘膜システム研究チーム 客員主管研究員)